

「伊吹！僕は君のことが大好きなんだ！！」

その一言を聞いた時、伊吹は一瞬固まった。

「え？・・・私？」

「そうなんだ！僕は伊吹のことが大好きなんだ！！」

顔を真っ赤にして恥ずかしそうにうつむいていたが、ルークが一生懸命告白をしていることはよく分かる状況だった。

状況が理解できると伊吹は思わず両手を口に当てルークと同じように顔を真っ赤にしてうつむいた。

「ルーク・・・実は私もあなたのことが好きだったの・・・」

「え？」

ルークが顔を上げると、今にも泣きそうな顔をしている伊吹がいた。

「あわわわっわ！！」

伊吹の顔を見てルークが慌てていると伊吹は首を横に振って慌てる必要はないということを訴えた。

「嬉しくて・・・嬉しくて泣きそうになっているだけだから気にしないで」

「そ、そうだったのか！ぼ・・・僕も伊吹が僕のことを想ってくれたなんて、すごく嬉しいぞ！」

ルークはしばらくの間ソファに座ったまま伊吹が泣き止むのを待った。

「急に泣き出しちゃってごめんね」

伊吹がそう言いながらルークの方を見ると、ルークはにこりと照れくさそうに微笑んだ。

「でもルーク、私のどこが良かったの？」

「うーん、全部かな？」

「全部？」

「そう、全部。気が付いたら寝ても覚めても伊吹のことばかり考えていた。

だからシメオンにこのことを相談してみたら、それは鯉をしているということなんだということを聞いた」

「それで告白してみたの？」

「いや。告白を決めたのは僕一人だけ。どうしても交換留学生としての期限が終わるまでにこの気持ちを伊吹に言いたかった」

「そうなんだ」

「伊吹は？いつから僕のことを好きになったんだ？」

「いつからって言われても・・・」

伊吹はいったん天井を見上げると再びルークの顔を見た。

「私も気が付いたらかな？多分魔界の生活に慣れてきたころかもしれない」

「そうなんだ。〴〵人とも同じだな」

〴〵人はその後しばらくの間いろいろなおしゃべりをしていた。

お互いの気持ちが伝わりあったせいだろうか。

ごくありふれたおしゃべりをしているはずなのに、〴〵人の間には恋人同士になろうとする人々の醸し出す甘い空気が流れていた。

「あ、もうこんな時間だ」

ルークがふと時計を見ると時計は23時を示していた。

「明日はRADに行く予定になっているから、そろそろ寝ないといけないな」

そう言ってルークは立ち上がってから伊吹の顔を見た。

伊吹の顔はどことなく不満そうだった。

「ルーク、もう寝ちゃうの？」

「まだ寝るという訳ではないが、そろそろ寝る準備をしないとならない。

伊吹も明日はここからRADに行く予定なんだろう？」

そろそろ寝ないと遅刻をしてしまうぞ？」

ルークの言っていることはものすごく正しいことではあったが、伊吹はさらに不満そうな顔をした。

「嫌、今日はルークと一緒にいたい」

「え？」

「だって、せっかく両思いだってことが分かったんだもん！

それじゃなかったって私たち一緒の場所に住んでいるわけじゃないし、あんまりたくさんお泊り会をしていると兄弟たちがうるさいし・・・」

「うるさいって、どううるさいんだ？」

ルークが声をかけると、伊吹はしょんぼりとしながら話を続けた。

「帰りが遅くなると、いつもどこに行っていたんだ？とか今日は何をしていたんだ？とか言ってきてうるさいんだよ。

特にマモンがうるさくて、今日のお泊り会だって、荷物取りに一回嘆きの館に戻ったら行かせないとか数が多いすぎるとか・・・。

本当にうるさい！って感じになっているんだよ」

「マモン以外はどうかんだ？」

「マモン以外は何も言わないよ。いつものことではあるんだけど、今日のお泊り会だってルシファーが行かせろって言うてくれたから来れたわけであって・・・本当にマモンってうるさい！」

「そうだったのか」

伊吹の説明を聞き終わると、ルークはうーんとうなりながらどうしたらいいものかと考え始めた。

「じゃあ、これからはお泊り会で伊吹がここに来たら一緒に寝ることにしよう！」

「いいの!？」

「うん!一緒に寝るだけだったら天使としても問題ないし、ミカエル様もきつと分かって下さるはずだ!」

「ルーク、ありがとう!」

一時間後、伊吹はパジャマに着替えるとルークの部屋のドアを開けた。

ベッドの方を見るとすでにルークが毛布の中に潜り込んでいた。

「お邪魔します」

そう言いながら伊吹が毛布の中に入ると、ルークはにこりと微笑んだ。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

ベッドサイドの明かりを消して部屋を真っ暗にする。

人はいくらくの間目を閉じてじっとしていたが、どちらかということもなく目を開けた。

「もしかして伊吹も眠れないのか？」

「ルークも？」

「ああ。なんとなく眠れないんだ」

「それって・・・私がいるからかな？」

「どうだろうな。なんとなく緊張しているような感じはする」

人はどちらかということもなく抱き付いた。

お互いの体温がとても温かく、心地よい感じがしたが眠れそうにはなかった。

「ねえルーク、私たち恋人同士になったんだし 𠬞しない？」

「は？」

「𠬞。セックスをすればお互いに眠くなる」